

朝夕は、まさに秋冷の候を体感できる時節となりました。

さて、本紙発行日の今月朔を記念日とする事柄は目白押しの様を呈しています。そのなかに「印章の日」が列挙されています。明治6年（1873）の太政官布告「公式文書には実印を押印すべし」に由来しています。印鑑が日本初お目見えするのは「漢委奴国王」と刻まれた金印で、弥生時代後期に漢の光武帝から下賜されたものとされています。もちろん実用ではなく、権威を象徴する、ある種の威儀具なのですが、奈良時代になると、公印として律令制度を支えるだけでなく、上級官吏の私印としてもてはやされました。本機関紙名にもなっている服部遺跡出土の銅印「乙貞」も歴史に名のある藤原弟貞の私印ではないかとのロマンが囁かれています。

その後、印鑑は雌伏の時を経て、近代になって一般庶民にまでその使用が広がります。しかし、欧米をはじめ世界水準となっている自筆サインや昨今のデジタル化の波によって、その行く先は決して明るくはないようです。中国から伝来した印鑑は漢字とともに日本の独自文化を形成したアイテムで、この先も印鑑が使われ続けることをひそかに祈っています。

それでは、今号も発掘調査成果とセンター事業を紹介いたします。

発掘調査だより

吉身南遺跡第11次調査の成果

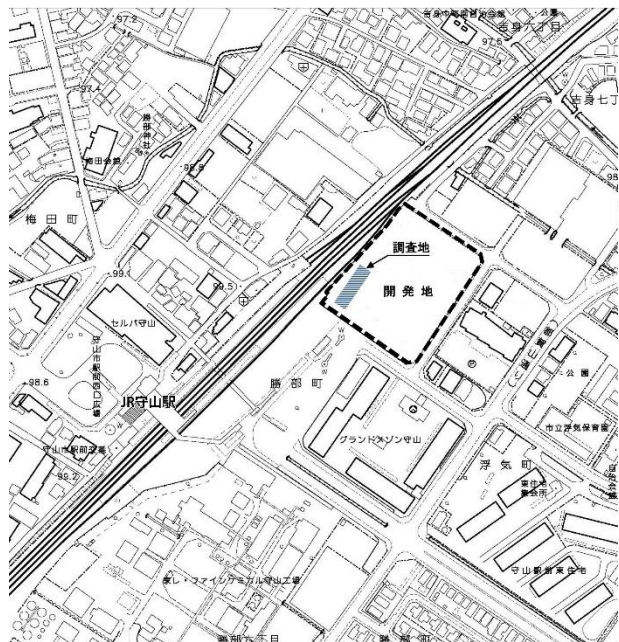
7月10日より実施していた村田製作所研究棟建設に伴う発掘調査は、8月3日で終了しました。調査地は、旧ライズヴィルつがやまと守山駅に挟まれた空閑地で、旧国鉄時代には線路敷だったところです。

隣接する旧ライズヴィルつがやま跡地は、昭和53年（1978）、江州煉瓦工場跡地につがやま荘（ライズヴィルつがやまの旧称）が建築される際に発掘調査を行っています。工場建設時に受けた攪乱箇所が多かったものの、古墳時代後期の竪穴建物や土坑などの遺構と遺物が見つかるなど、大きな成果を挙げています。

今回の調査は、調査区1と2を設けて実施しました。造成土下には旧国鉄時代の線路砕石が残っていて崩れやすいことや、遺構面が地表から約1mの深さにあることから二段に掘り下げたため、結果的に幅約6m、長さ38mが調査範囲となりました。

今回の調査でも、竪穴建物、土坑、ピット、溝などが見つかっています。

竪穴建物は、調査区の中央付近で西南辺を検出しましたが、調査区外に広がっているため、方形プランの建物という以外、全容はわかりません。深さは10cm足らずで、床面からは支柱穴



調査位置図

と壁に沿って焼土が認められ、土師器が出土しています。

土坑は、大小8基を検出しました。溝2条（溝1、2）は平行して東西方向に走る溝です。

竪穴建物や土坑、溝から出土する土師器、須恵器は、いずれも6世紀代に時期比定できることから、古墳時代後期に併存した遺構と考えられます。

また、吉身南遺跡の竪穴建物で普遍的とっていいほど出土する滑石の臼玉も数点出土しており、このことから、守山駅西口一帯に広がる吉身北遺跡とともに大集落を形成していた吉身南遺跡の集落域の一角であることが想定できます。

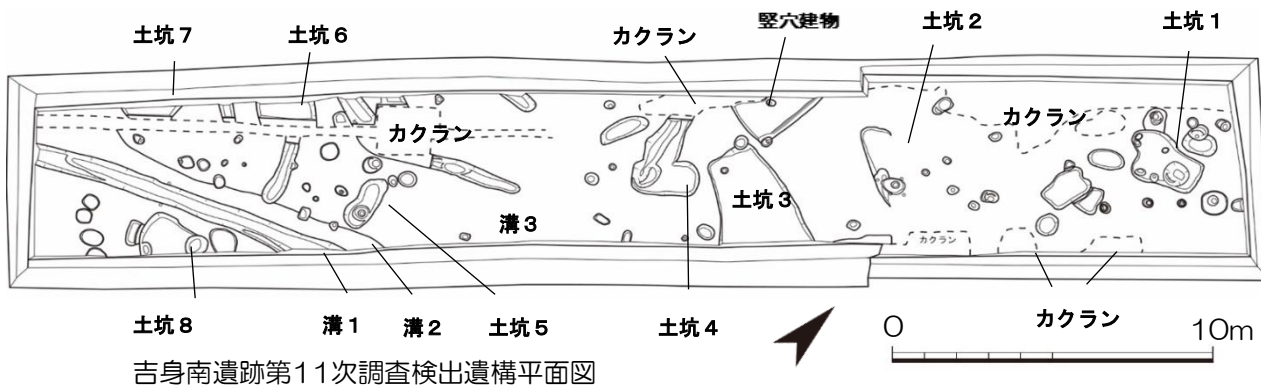
近年、過去に調査された開発地の未調査箇所を調査する機会が生まれています。その結果、過去の調査成果を追認する場合と新たな知見を得る場合がありますが、今回の調査は、昭和の時代に行われた発掘調査成果を追認する結果となりました。（畑本）



調査区1全景写真



調査区2全景写真



吉身南遺跡第11次調査検出遺構平面図

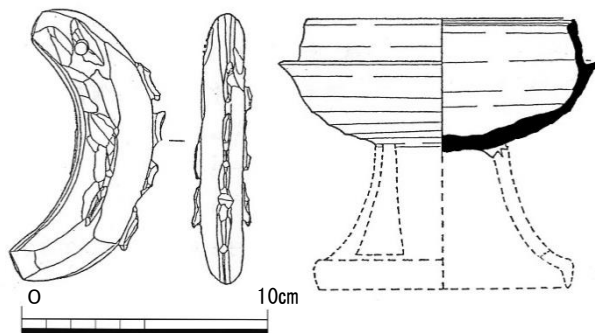
吉身南遺跡の子持ち勾玉

ここでは、昭和57年11月30日発行の本紙第8号に掲載されている吉身南遺跡で見つかった滑石製子持ち勾玉を紹介します。子持ち勾玉は、全長約12cm、幅3cmほどの大きさで、伴出している須恵器の高坏から、11次調査と同時期の古墳時代後期の遺物です。

子持ち勾玉とは、通常の勾玉に比べて格段に大きく、装身具というより祭祀具として使われたと考えられています。

この勾玉は、江州煉瓦工場が操業していた頃、レンガ用の粘土を採掘していた際に図示する高坏とともに見つかったと記載されています。

吉身南遺跡では、竪穴住居から高い確率で滑石製の玉類や未製品、剥片が見つかっていて、6世紀代の集落では、遠隔地から滑石を入手して玉生産を行っていたと考えられます。そして、特殊な子持ち勾玉も一般的な勾玉や臼玉、小玉とともにつくられたものかもしれません。



子持ち勾玉・須恵器高坏実測図

歴史入門講座第3講・第4講の開催結果について

歴史入門講座第3講は8月19日（土）、第4講は9月16日（土）に開催し、多数の受講者がありました。

第3講の講師は鈴木康二さん（[公財] 滋賀県文化財保護協会）で、ご自身が安土城考古博物館でプロデュースされた企画展示内容から「弥生時代の大型建物から見えてくるもの—弥生社会とマツリゴト?—」をテーマに講演していただきました。

全国の大型建物を概観したうえで、様々な機能をもっているにもかかわらず、大型建物として一括されている点を指摘したうえで、伊勢遺跡の大型建物群については、定説化しているクニの政治中枢であったと独自の視点でわかりやすく講演していただきました。

9月16日（土）に開催した第4講は阿刀弘史さん（[公財] 滋賀県文化財保護協会）に講師を務めていただきました。阿刀さんは、赤野井浜遺跡の調査で数多く出土した木器・木製品



第3講受講風景



第4講受講風景

をきっかけに木器研究の道に進まれました。

今回は「木製品の製作から見た弥生時代の生産」をテーマに、弥生時代の木器、木製品が如何に生産されたかにフォーカスした内容で、誰もがイメージする自給自足的な生産とは違う調査成果を列挙され、弥生時代すでに分業体制が整っていたというご自身の結論を導き出されました。

鈴木さん、阿刀さん、ご講演していただきましてありがとうございました。

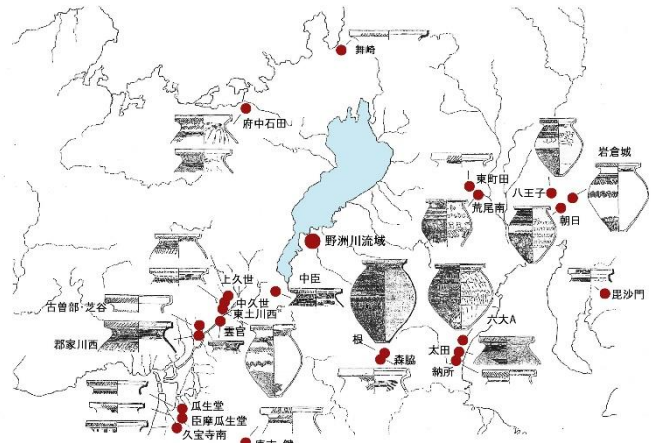
本年度の歴史入門講座は既に受講定員に達しましたため、受講申し込み者以外は受講していただけません。ご了承ください。なお、講座資料は受講者以外の方にも配布させていただきますので、希望される方は埋蔵文化財センターまでご連絡ください。

只今開催中の秋季特別展から展示内容の一部を紹介させていただきます。

弥生時代後期の守山では、受口状口縁甕と呼ばれる野洲川流域ならではの形や文様をもった甕が使われていました。そして、この受口状口縁甕は野洲川流域にとどまらず、近畿地方はもとより、東海・北陸地方でも見つかっています。

このことから、遠隔地域との交流を看取できます。さらに積極的な視点として、野洲川流域の集団が受口状口縁甕が出土する地域に影響を与えていたとする考え方もあります。

弥生時代の野洲川流域は、経済、政治的にもポテンシャルを持った地域なのです。



弥生時代後期の受口状口縁甕の出土遺跡

秋季特別展を開催しています！

10月1日（日）から平成5年度秋季特別展を開催いたしましたので、ご案内いたします。

今秋、伊勢遺跡史跡公園がオープンすることから、『野洲川流域の弥生文化を探る！』をテーマに、稲作を取り入れた服部遺跡から始まり、滋賀県南部にクニが建ったことを物語る伊勢遺跡まで、野洲川の沃野に醸成された弥生文化を探っていきます。また、弥生時代の祭器である袈裟褌文銅鐸（複製品・野洲市歴史民俗博物館所蔵）も展示しています。



袈裟褌文銅鐸の展示風景



伊勢遺跡大型建物柱痕の展示風景



秋季特別展開催チラシ

開催期間は12月17日（日）までです。普段展示していないものも数多くありますので、是非ご覧ください。

なお、休館日は、毎週火曜日と休日の翌日である11月4日（土）、11月24日（金）となります。入館無料、開館時間は午前9時から午後4時まで（入館時間）となります。

これまでの乙貞や新着情報は、『歴史のまち守山』やFace Bookからもご覧いただけます！



←歴史のまち守山はコチラから

<http://moriyama-bunkazai.org>

守山市立埋蔵文化財センターFacebook ページはコチラから▶

<https://www.facebook.com/MaibunMoriyama/?ref=bookmarks>



【後記】現在開催中の秋季特別展では、「野洲川流域の弥生文化を探る！」をテーマに、弥生人が暮らした集落、稲作の場である水田、そして死者を葬った墓域を取り上げています。このムラ・田んぼ・墓はどれも欠けてもなりたない相互関係にあります。弥生時代は、溝で四角く区画した方形周溝墓がスタンダードな墓でした。方形周溝墓は、当初は首長の墓、調査が進むと家族の墓とその性格が翻り、昨今は血族の墓、つまり夫婦であっても血縁関係がないという理由で一緒には葬られない。血縁のないものは生家の墓に葬られるのではないかという説が唱えられるようになっていきます。現代人の感覚からは、いささかショッキングな新説と言えます。

苦楽をともにした夫婦であっても墓は別ということから、少なくとも昭和の時代まで、婚礼の際に女性は嫁ぎ先でなく生家の家紋を入れた和装の喪服を持参する風習を想起しました。嫁ぎはしたが、生まれ育った生家への矜持、あるいは帰属意識を失っていないことの決意の表れなのか、いろいろと考えてしまいます。おそらく有職故実を調べれば、その由来を理解できるのですが、特別展の準備で弥生文化のフィルターがかかった身では、このような風習の淵源が弥生文化にあり、婚姻関係のある集団と同様に、出自のある集団を慮る意識が脈々と継承された結果と勝手に結論づけています。

稲作を契機に成立した弥生文化は幾星霜重ねても色あせることのない文化であることと、弥生時代に稲作を生業とした集団は、決して順風満帆な発展を遂げたのではなく、存亡の危機に陥ったときには集団相互が助け合う、その紐帯が婚姻関係だった。弥生文化の展示に携わったおかげで妄想は限りなく広がります。
(馬耳東風)

